

アダム・スミスの Compensation と Atonement について

大 政 憲 一

I. はじめに

スミスの二つの主著のうち『国富論』（以下においては、WN と略記して用いる）において、補償（代償、つぐなう）なる概念ならびにその同義語が150ヶ所以上にわたって用いられていることに不思議な感懷をいだき、とりまとめたのが、「〈補償原理〉について」⁽¹⁾であり、引き続いてそれをバネとしてもう一つの主著『道徳感情論』（以下においては TMS と略記して用いる）にみられる補償概念についてとりまとめたものが、「〈補償原理〉再論」⁽²⁾であった。

さらに、この補償概念を現実の世界経済の運行の説明に応用してみんとしたものが、「世界経済の歴史的代償過程について」⁽³⁾であった。

三本の論文に共通する問題意識について、今ふり返ってみると、はじめの頃の素朴な意識の下に、何とか論文をまとめようとする思いが強かったように思えるのだが、現在では、多くのスミス研究者にとっては、「気づかないで、あるいは注目されないで見過ごされてきた概念 (unawared) あるいは意識の下に埋没した言葉 (sunk word) ではなかったのか、それは些事であるがゆえにそうだったのか、と20年以上自問しつづけたが、答えは否、むしろスミス体系の key-word ではないかとの思いが日に益して強くなっている。

他方において、贖罪 (atonement) についても気づいてはいたが、キリスト教文明のバックグラウンドについての自らの素養の貧困のため、意識的

に避けてきたのも事実である。

本論文では、この二つの言葉をスミス思想体系の中で結び合わせ、解釈を試みるものである。

II. 先の拙論「〈補償原理〉再論」の補充

まず、筆者の上記拙論⁽⁴⁾の155頁で試みた図解の中で、理解不足あるいは不十分な説明に終わっている部分から始める。

それは、TMSの第一部「行為の道徳的適性について」(Of the Propriety of Actions)の第3篇「行為の道徳的適性に関する人々の判断に対して、繁栄と逆境の与える影響について、なお前者の状態にある時の方が後者の状態にある時よりも人々の是認が得やすいのはなぜかについて」の第2章「野心の起源ならびに身分の区別について」、ならびに同3章「このように富者や偉人を称賛し、貧困者や下賤の者を軽蔑したり、あるいは無視したりする性向のために起こる道徳感情の頹廃について」(上記を簡略化して、TMS I-iii-2, I-iii-3と以下では記す)の解釈についてである。

「貪欲・野心の究極の目的 (the end of avaris and ambition), すなわち富と権力と優越を追求する最期の目的は一体何であろうか。それは自然の欲求を満たすためであろうか。……われわれの関心を掻き立てるのはむしろ虚栄 (vanity) であって、安楽とか快楽 (easy and pleasure) とかではない。……なかでも身分の高貴な人は世間のすべての人々から注目せられる。彼は常に人々の関心を呼び起す機会をもち、また彼をとり巻くすべての人々の観察と同胞感情の対象となる機会をもつ。そして彼はこのような拘束を受けるにもかかわらず、またそれにとまなう自由の喪失にもかかわらず、そのことが偉大さの追求のために払わなければならないすべてのあの骨折り、すべてのあの配慮、すべてのあの難行苦行を償ってなお余りありとすべての人々が考えるのは、右のような事実にもとづくものである。そしてなお一層重要なことは、一旦人々がこのような高貴な地位を獲得してしまえば、永久に失われてしまうにちがいないあのすべての閑暇、あの

すべての安逸、あのすべての呑気な安全性をも、なおそれは償って余りあると人々が考える事実である。(, and compensates……all that toil……)⁽⁵⁾」

つまり、われわれが想像力を働かし、ややもすると色メガネを通して高貴な人々の境遇を考察することにより得られる観念こそが、「完全な状態」ならびに「幸福な状態」に関するほとんど理想的観念となり、われわれが究極的に目指す目的と思ひこむのである。従って、現実にはこのような境遇にある高貴な人々の満足に対しては特別の同感 (sympathy) を感ずるものである。

また富者に対しても同様の特別の同感を感じずるものである。従って、「富者や権力者の抱くあらゆる情念と同じ情念に常にひたりたいというこの人類の性情を基礎として (Upon this disposition of mankind, to go along with all the passions of the rich and the powerful, ……) 身分の差別や社会の秩序 (the distinction of ranks, and the order of the society) が確立される」⁽⁶⁾と。

ここでスミスは保守的哲学をのべている。「国王は人民の公僕であり大衆の必要とする便宜に応じて服従されたり、反抗されたり、退位させられたり、時によると罰せられたりすべきものであるというのは、理性と哲学にもとづく学説であって、人間自然の本性にもとづく学説ではない。自然の本性はわれわれをしてかれらに対し服従のための服従をし、かれらの気高い地位に直面しては、自ら身震いして頭を下げ、彼らの微笑があらゆる奉仕を償って余りある (sufficient to compensate) 充分なる報酬とみなし……最も強い動機、最も激しい感情、恐怖、憎悪、怨念といえども、この高貴な人を尊敬しようとする自然の性向を相殺する (to balance) に足るほど強力なものは滅多に見つからない」⁽⁷⁾」

他方高貴の人達は、大衆から受ける称賛を何によって獲得するのか、彼らはそれを安価に入手できる (cheap price) ことに気づいているのか、それとも身分の低い人々と同様の汗か血の代償を支払わねばならぬ (it must be the purchase either of sweat or of blood) ことを想像しているのでは

ろうか、……厳しいしつけ教育によってであろうか(知識)、勤勉にであろうか、それとも忍耐によってであろうか、あるいは自己否定によってであろうか、それとも別種の徳(美德, virtue)によってであろうか。これにスミス自ら答えて、ルイ14世の例を引いて答えている。全て否と。彼はたぐい稀なる才能と徳によってでもなければ、用意周到な企図にでもなく、不撓不屈の正義感に貫かれていたからでもなく、また彼の企図したものが危険と困難に相遇それを克服したことによったのでもない。また彼の熱心さによってでもなければ、英雄的勇猛さのためでもなかったし、彼の判断の正確さによるものでもなかった。これらの諸性質(諸徳)は、彼の偉大なる名声をかちうるために何の役にも立たなかった。……では何をもって? 「……右にのべたような優雅な振舞、魅力的な音声などといったくだらぬ身だしなみがそれであった。」まさしく安価に、安価な代償によって国民の尊敬をかちえたのである。

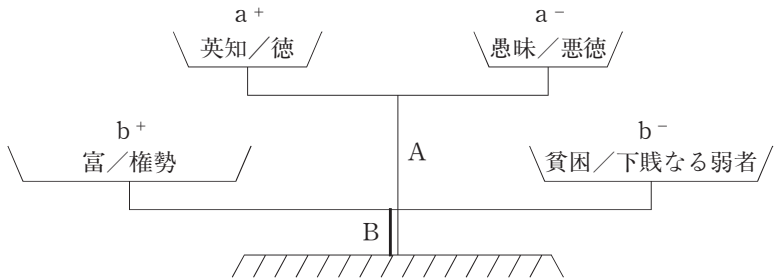
逆にいえば、スミスのいうごとく、middling and inferior ranksの人々が、彼を真似ても無駄であり、彼らの目指すべき諸徳は、彼が持たなかったものであるべきだ。彼ら、中、下流階級の人々が、勤勉と能力(才能)に応じて各人各様の徳分で身を立てることの中に、スミスは富の道と徳の道の一致(両立)の可能性を見出したのである。

続いて、TMSのI-iii-3(本章はスミス晩年の最終改訂第6版で初めて挿入された)の冒頭で次のように述べる。

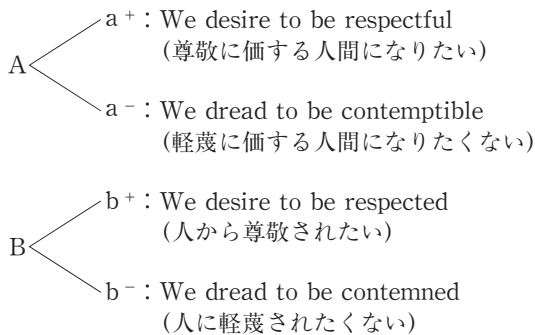
「富者や権力者を讃美するばかりでなくほとんどこれを崇拝し、貧者や下賤の者を軽蔑するか、さもなくば無視するこの性向は、たとえ身分の差異と社会秩序をも設定し、かつそれを維持する上に必要欠くべからざる要素であるとはいえ、それはまた同時にわれわれの道徳感情を頹廃せしめる大きな、そして最も普遍的な原因でもある。」ここにもスミスの二者間のバランス、compensationの含意を読みとることができる。

前者の社会秩序維持機能については上述したので、後者の作用についてみる。

筆者は、スミスは次図のごときバランス（天秤）を想定しているとみる。



われわれは同時に二つの感情をもつ。Aの天秤(a^+ , a^-)で考える人々のコースと、Bの天秤(b^+ , b^-)で考える人々の二つのコースに分れる。



スミスはこの二つのコースについて、世間の大多数の人々はナイーブな時期をすぎ、世間の見聞を広めるにつれ、Aコースの a^+ のみが唯一尊敬されるものでもないことを、また a^- のみが唯一軽蔑の対象でもないことを知るようになる。そして大多数の一般庶民は自分達の価値判断コースをBコースにとる。

Aコースをとる人は限られた数のエリートの道を歩む人々か、あるいは野心/競争をあきらめた人々の歩む道である。しかも世間の評価についての順位は、①賢人、聖人 < 富者、偉人とみなし、後者に尊敬の眼をむける。②権力者の悪徳、愚昧 < 無力者の貧困、薄弱とみなし、後者に対して一層軽蔑の眼を向ける傾向があるものであると。

高貴の地位が a^{-} によって完全にけがされてしまう場合のあることも疑う余地はない。しかし a^{-} が非常にはなはだしくなれば、完全な頽廃作用を及ぼすことは少ない。(②の理由より)それに対して、後者の場合(貧しい者、下賤の者)にあっては、節制や適宜性の諸規則に少しでも違反すると、不断に公然とこのような規則を軽蔑している前者に比べて、はるかに激しい憤激を招くものである。

従って、Bコースを歩むといえども、中位あるいは下層の階級の人々は、「正義の一般規則」を土台にして、富と徳の道の三位一体が実現しうる可能性が開けていると考える。

「……そのほかに、中流もしくは下流社会の人々は、一般に、正義というはるかに重要な規範に対して少なくともある種の畏敬の念を抱かざるをえないようにするところのあの法(law)を超越するほど偉くなることは絶対にありえない。……それ故に、かような境遇にある人々に対しては、われわれは一般に相当の程度の徳(美德)⁽⁹⁾を期待していいわけである。」しかも good morals of society にとって幸いなことは、大部分の人類がこのような境遇におかれていることである。

これがスミスの認識であって、それは丁度 WN において、大多数の国民の貯蓄本能(the principle which prompts to save)が国家による浪費、不始末ばかりか、私的個人の浪費をも償ってきたのが、人類5千年の歴史であると述べていることに対応しうるのではないであろうか。すなわち、高貴な上流階級の徳の頽廃は過少評価され、国民全層に伝染しにくく、また上述のようにもし完全にけがされた場合には、長い歴史的時間をかけての体制変革とその後の歴史的代償(historical compensation)⁽¹¹⁾を支払わねばならないであろうし、そこからの国家再生の希望の基礎は、やはり中、下流階級の絶えざる justice (general rules) の遵守、勤勉、諸徳の積み重ねしかあるまいと思われる。

それにひきかえ、富者や権力者、あるいは身分上の上流階級の人々には、たいして徳行を期待できないとスミスはみている。さらにこのような羨望

の地位に到達せんがために幸運を求める志願者達も往々にして徳への道を踏みはずしがちだと論ずる。

なぜなら、かれら野心家達にとっては、不幸にも、幸運への道と徳への道は正反対に向っていることがしばしばであるからである。「……その国の最高の地位をめざす人々は、例えば法を超越し、自らの野心的目的を達成できるとなると、彼らがそのために用いる手段の善悪に責任を問われることを何とも思わない。陰謀、術策、詐欺不正を行うばかりか謀殺をさえ躊躇しない。しかし大願成就の暁をむかえたとしても、彼らが日々楽しもうと期待していた幸福に痛ましくも最も失望するのが一般であろう。「彼は神に祈ってその暗い陰うつな忘却の力ないしは堙滅の力を得ようとしても、それは無駄である。彼は自分がかつて何をしたかを覚えている。そしてその記憶は他の人々もまた彼の過去の行為を記憶しているに相違ない、ということを経験に彼に自覚せしめる。」

スミスは、ここで直接的にその語を用いてはいないが、「真黒な不愉快きわまる恥辱の鬼と自己の猜疑心」を代償として得た野心の成功の裏面のバランスを示唆している。

III. Atonement とその解釈について

1. TMS 本文テキストに即して

スミスは TMS 本文中数ヶ所で atonement とその同義語を用いている。(スミスの両著に頻出する compensation と、TMS で限られた場所で見られる atonement は、辞書的には同義語とされるケースも多く、実際スミスもこの両者を同義的に用いている場合もあることを以下で証したい。

スミスの atonement 概念について、問題にされる箇所は、スミス自らが第 6 版改訂にあたり削除された部分と、そのことに関してグラスゴウ版スミス全集を刊行した編者の付した TMS 巻末の Appendix II とそれをめぐる議論である。筆者が読みつづけてきたのは、その第 6 版であるが、スミス自身は削除について何の脚注もなく行っているのであって、後世の

人のスミスよりの伝聞の形で、それは unnecessary にして、misplaced と語ったというものである。ただしこの第6版でも、脚注引用として小活字ではあるが、その全文を読むことができる。なお、第6版で初めて付け加えられた部分に、atonment について述べられてもいるが、順序として、先ずその削除された文より始める。

スミスは、神が(美)徳を愛し、悪徳を憎みそれらに対し賞罰するのは人間社会のためであるとする教説は、理性と哲学の教説であって、人間の自然的(純粹に自然の)感覚ではなく、また古代の哲学の教説でもないと言ったのちに、「……しかしながら、そのためにもし悪徳が神にとっては悪徳自体のために嫌悪と憎悪の対象として映ずるのではなく、またそれ自体のために正当に罰せられるべきものとして映ずるのではないと解するならば、このような主張は——たとえそれが真実であろうとも——ある種の極めて自然的な感情に対して矛盾する。もしわれわれが自分の自然の感情にしたがうならば、神聖な神の面前に出ては、人間の不完全な(美)徳がいつかは報償に値いするものと思われる以上に、悪徳はその数十倍の強さで処罰に値いすべきものと見えるのではないかとの怖れを抱かざるをえないのである。……(尊敬と称賛の対象として映ずる以上に)……したがって彼は何故に神がかくも低級な虫けらどもに対してその憤激を無制限に放たれてはならぬか、に関し何らの理由を見出すことができないはずである。それにもかかわらず、もし彼が幸福に対する希望を失わないならば、彼はそれを神の正義にもとづいて要求することはできず、神の慈悲に対して懇請しなければならないことを、意識している。彼の過去の行動を考えた時の、良心の苛責、悲哀、屈辱、悔恨などはそれ自体のために起るところの諸感情であり、同時にまたそれらの感情は、彼が十分に心得ているように、自分自身に対して発せられたかの正しい憤怒を慰撫するための、彼にとってはなくもがなの唯一の手段であるように思われる。彼はかような手段の力を信用せず、そして神はその叡知のゆえに、罪人がか弱い人間のごとく慟哭をもってするくらいでは——たとえそれがいかにうるさく泣き叫ばれよう

と——それに大いに感動してその罪をとりなしたりはしないであろうとの観念的な恐怖に満たされる。神の正義の純粋性を彼の犯した種々様々な過誤と和解させるに先立って、何か他の調停、他の犠牲、他の贖罪 (some other intercession, some other sacrifice, some other atonement) が神に対して捧げられなければならない、と彼は考え、しかもそれは、彼自らがなうるところとともに、さらにはそれを超えて、彼のためになされなければならないと、彼は想像する。神の啓示に関する諸教義は、あらゆる点で自然がこのような仕方ですでにわれわれに本源的 (生得的) に教えている事柄に一致する。すなわちそれらの教義はわれわれに、われわれが自分自身の不完全な (美) 徳に頼りうり点がいかに少ないかを告げており、しかし同時に……最も恐るべき贖罪がなしとげられている (……the most dreadful atonement has been paid for⁽¹²⁾……) ことを示している。」

見られる通り、ここでの atonement はキリスト教的な原罪に対する贖罪を示していることに異論はなかろう。ただ、ここでの文脈は人間の自然の諸感情を土台に据えて、限定された範囲内 (人間界) の正義=徳の体系を論じて、必然的に人と神の関係 (宗教) を措定せざるをえないことを述べる中での文章であるということである。

次に、TMS の II—iii—2, II—iii—3 において述べられている atonement について。

ここでは、普通に適切な注意力をもってしてではなく、普通には過度と思える程の注意力が不足したことによってひき起され、他人への損害を与える場合が生じた時に、その人はしばしば法律によって損害を賠償しなければならない例を示す。iii—2 「偶然性 (運) の与えるこのような影響の範囲について」においては、

①……he is often by the law obliged to compensate it. ② Thus, by the Aquilian law, the man, who not being able to manage a horse that had accidentally taken fright, should happen to ride his neighbour's slave, is obliged to compensate the damage. その他数例あり。

③ To make no apology, to offer no atonement, is regarded as the highest brutality.

④ Why should he, since he was equally innocent with any other by stander, be thus singled out from among all man kind, to make up for the bad fortune of another?⁽¹³⁾

それにつづく iii-3 すなわち「諸感情のこのような不規則性の起る究極的原因について」の章においては。

ここでは、(諸)行為の(諸)意図と(諸)結果に影響を及ぼす偶然の運の関係を論じているのだが、あらゆる司法上の法廷が真の異端糾問所となることを避けるために、自然の創造者は人間の刑罰と報復感にとって唯一の適切にして、是認されたる対象を、諸行為の結果に限ったのである。人間の諸行為に付随する全ての功績(値うち)とすべての罪過(欠陥), merit and demerit, の判定に当っては、その sentiments, designs, affections にもとづいて処罰されないという司法上の原則 (general rules) は、それらについての判定は天上の裁判所(神の法廷)に委ねられ、あるいは保留されているのである。これは一見すると、非常に矛盾した、いつの世にも不満の種であったし、また徳の力を大にくじく原因でもあるが、深く考えるならば、そこにも自然が人間の胸の中にこの感情の不規則性(感情のゆれ、不持続性、非一貫性をさす言葉と思われる)の種子を植えつけた時に、他のすべての場合と同様にわれわれの種属の幸福と完成とを意図していたように思われる。⁽¹⁴⁾ すなわち、善、徳、美……は行為により結果として表わすことを自然は期待していることを示している。それが善行は励め、悪行は慎しめとの自然の深慮といわれるものと考えている。Providential care of its Author, the wisdom and goodness of God, がそこにひそんでいることにスミスは讃嘆の念を表明している。

このことを踏まえた上で、第6版において追加(筆者傍点)されたところでは、

⑤ 昔の非キリスト教的宗教では, (As, in the ancient heathen religion)

ある種の神に献納せられた聖地は、儀式やその他必要な場合以外には、そこへ足を踏み入れてはならぬとされ、たとえ知らずといえども禁を犯した人はその瞬間から贖罪を必要とする有罪者となり、適当な贖罪の済むまでは、この土地の献納された強力なる見えざる存在の復讐を受けるようになるのであるが、……the man who……, became piacular……and untill proper atonement should be made, incurred the vengeance of that powerful and invisible being to whom it had been set apart……)

⑥それと同様の方法でもって、すべての罪なき人の幸福は、自然の英知がこれを神聖なもの、神に献じられたものとなし、他者がこれに近づかぬよう周囲に垣根をめぐらしている。……知らずして、また不本意ながらそれらを侵害したりしてさえも、……その程度に相当するだけの贖罪と代償とを要求しないではおかないのである。(without requiring some expiation, some atonement in proportion to……)

⑦ A man of humanity, who accidentally, and without the smallest degree of blamable negligence, has been the cause of the death of another man, feels himself piacular, though not guilty.

⑧……It is this fallacious sense of guilty, distress of Oedipus and Jocasta upon the Greek, of Monimia and Isabella upon the English, theatre. They are all of them in the highest degree piacular, though not one of them is in the smallest degree guilty,⁽¹⁵⁾

つぎに、TMS のⅢ－ii の ‘Of the love of Praise, and of that of Praise-worthiness; and of the dread of Blame, and of that of Blame-worthiness’ の文中において。

ここでは「世評」(世間的評価)に合わせて、自らの行動を判断することに対して、公平無私なる観察者(impartial spectator)基準を対比させながら、極悪非道の犯罪を犯したその犯人が、たとえその犯行を知っているものが誰もいないと確信できたとしても、またそれに対する復讐をする何らの神もいないと信じることができさえも、予想されうる恐怖と悔恨は

二つながら充分に彼の全生涯を堪えがたいものにするはずである。このような良心の呵責のゆえに、宗教を無視したどんな原理といえども完全にかれらをそこから救い出すことはできないで、絶望と狂乱の淵に追いやる悪魔であり、復讐の怨霊である。⁽¹⁶⁾ そうした場合、かれらが自らの死をもって自己の罪を認め、被害者の報復感に自ら服従することで、彼らの自然の報復感と和解することを希望するのは、「かれらが自分達を憎悪や報復感を受ける資格がないもののように考えたいからであり、……ある程度まで自分自身の罪亡ぼしをしたいからであり……できることなら恐怖の対象となるよむしろ同情の対象になることによって平和に、自分達の仲間の者に許されて死にたいからである。」⁽¹⁷⁾

……, By acknowledging their guilt,……they hoped, by their death to reconcile themselves, at least in their own imagination, to the natural sentiments of man kind; to be able to consider themselves as less worthy of hatred and resentment: to atone in some measure, for their crimes……

以上の例を検討する。①, ②, ③, ④は全く atonement = compensation = make up for で同義的に用いられていることが分る。

⑤, ⑥, ⑦, ⑧の例は同一の文脈で語られているのだが、(昔の非キリスト教の世界という状況の中で) 神に寄進された特別の囲われた神聖な土地を知らずして犯した場合に受ける atonement と同じように、人間の生命を不本意に侵害した場合には expiation (すなわち／そして) atonement が要求される。これらは人(人類ではなく、その罪を犯した個々の人)と被害者たる個人との関係において生じるものであって、最初の贖罪(atonement)とは性格を異にするものと思われる。そしてその関係をより一般化したものが⑦の例と考えられる。ここでは、expiation と atonement をやや性格のちがったものと捉えており、atonement は expiation の精神性よりも(やや)具体的内容を伴う行為を指すように思われる。

もし正しければ、この場合も atonement = compensation と理解して差

しつかえないように思える。ただ、主として人と人との間の個人的代償(贖罪) 関係といえども、よくよく考えるならば個たる加害者の心情の一部分には、人と神との関係における贖罪感情は残存するはずである。

⑧の例は、⑤、⑥、⑦の例に共通する fallacious sense of guilty の演劇効果と人々の同感(同情)を惹く効用についてギリシャ悲劇(ソフォクレス「エディプス王」の主人公オイデプスをめぐる悲劇)と、T. Otway「孤児または不幸なる結婚」の孤児モニミアと彼女をみとっていた年老いた宮内官の二人の息子達との悲恋話と T. Southerne の「イサベラまたは呪われた結婚」の主人公の悲劇なる英国劇の例である。

いずれの悲劇も自らの死か、自分の目をくりぬいて放浪の旅に出る。これも上述の例と同じく、いわば自己贖罪と見ることができるけれども、その一面において当人の感情の残存部分、より正確には基底部分に当人達と神との(非キリスト教的神)間の atonement 感情、さらにそれを一般化すれば、異教ながらの atonement の存在をスミスがインプリシットに示していると思うのではないのか。

そして⑨の例である。

ここでは正しく①～⑧までの不本意な意図せざる罪に対して、極悪非道の犯罪を対置してはいるが、そしてそれがたとえ完全犯罪に近いもので、なおかつ彼自身神の存在を信じなくても良心の呵責(impartial spectator)により遂に自死を決行する際の感情の分析をする中での自己贖罪(self atonement) についてである。

①～⑨までの例について、個別分析から見えてくるもの、グループ化して見えてくるもの、全部を通して見ることで、スミスが主張したかったものは何であったか、が見えてくるように思える。

(1) 「昔の非キリスト教の世界では」におけるスミスの歴史認識では、たとえばユダヤ教にまで遡って、さらに⑨例にみるようにギリシャ時代まで遡って atonement を考察している事実をどう解釈するかという問題。

(2) ①～⑧の諸例を TMS の II—iii の文脈の中でいかにとらえるかの問

題を抜きにしては考えられない点について。

(3) 試みになしたグループ別の検討より見えてくるもの

(1)については、啓示宗教としてのキリスト教以外の宗教においても atonement 感情は共通すると見うる。本論文のはじめにおいて述べたように、筆者の能力を超える分野のことではあるが、素朴な人間の自然の感情よりすれば——スミスはこの感情を TMS の基本に据えたのだが——三大一神教のキリスト教以外でも、啓示と atonement はありうる(成立しうる)のではという疑問

なおまた、慈悲—救済関係に限れば、啓示なき宗教(仏教、その他)感情の上下間交流として一神教的 atonement に相当する概念が対応しうるのではないか。かかる感情の普遍性。

さらに直感的には、人の生命に重大な影響を及ぼす程の罪には atonement を割り当てたとも見うるが、それ以外では atonement でも compensation の使用に大差なく exchangeable と見うるのではないか。あるいは人と神のタテの関係の罪の感覚に対しては atonement を、それ以外はいずれでも exchangeable だが、そこは修辞学を治めたスミスの語感のおもむくままに、と考えるのはゆきすぎか。

(2)に関しては、9例に対して、スミスの一貫した考え方は、意図せざる／意図した犯罪の各々について、運(fortune / misfortune)や人間感情の不規則性(不斉一性)を考慮したうえで、現世における人々の感情の同感(共感)作用と是認／否認感情からみての atonement, compensation, expiation に厳正な宗教学者の定義的区別を必要とするとは、スミスは考えていないと推察されるが、いかがであろうか。

(3)については、既にこの世での罪に対する自己贖罪と原罪に対する atonement の対比はただちに思い浮かぶが、それで結末がつくかという問題。たとえば、両眼を自らくりぬいたオイデプス(self-atonement)は、それでもなお罪の深さを悟って放浪の旅に出たのではないのか。……その彼を待っているものは……。はるか昔の古い異教徒であってさえも。

2. Appendix II とその解釈をめぐって

この Appendix II ‘The Passage an Atonement, and Manuscript Fragment of Justice’ はグラスゴウ版アダムスミス全集の編集者 A. L Macfie and D. D. Raphael によって巻末に付け加えられたものである。

筆者が I において論じたように、TMS 本文での 9 つの例にみられる atonement の同義語と第 6 版で本文より削除されたパラグラフの中の atonement の中で、この付録で論ぜられるのは、神と人との関係において述べられた atonement、すなわち、第 6 版で削除された文中の 2 ケ所に関する言及についてのみである点をまず指摘しておきたい。

しかも、第 6 版テキスト本文中でも脚注においても、スミス自身はこのことについて一言も表記していないということでもある。

そこには上記編集者が脚注で、This sentence was added in ed. 6, replacing a concluding paragraph that had appeared in ed. 1-5. We give below the text of the paragraph as printed in ed. 1, with variants of later editions. See also Appendix II とあるのみである。

その付録の冒頭部分で、There has in fact been a curious controversy about possible reasons for Smith’s withdrawal of the paragraph.⁽¹⁸⁾ と述べられており、第 6 版で該当部分が削除された理由に関する学説史的説明がなされている。筆者の注意を惹いた部分は、J.レーの見解、A. シンクレアの見解であった。

これらについて、田中が、「アダム・スミスの贖罪論」⁽¹⁹⁾で述べていることを検討する。

その 7 節「贖罪説削除の理由」で述べているところを引用する。

①多くの研究者が古くから主張してきた見解の一つにヒュームの影響説がある。スミスは、ヒュームの影響で正統信仰に懐疑的になったため、贖罪信仰を放棄したのではないかという解釈。それに対しては J. レーの反論がある。グラスゴウ版 TMS の編者は、「ヒュームとスミスの交友関係は 59 年にこそ最も緊密であったのであり、スミスの atonement 論が 59 年と 90 年

で変ったと考えるべき根拠は何もない。」との J. レーの反論の上で、改めて第 3 版以降にヒュームの宗教批判がみられると指摘する一方、ヒュームに対するスミスの敬意から、ヒュームの悪口批判をなしてきた説教者たちと同じような正統信仰の表明でヒューム批判を締めくくることが嫌気がさして、この贖罪節を削除したのではないかとする説。

田中は、第 3 版や第 5 版でなく、なぜ第 6 版になってそれを削除したのかには十分答えられていない、と考える。筆者も同意見である。

②もう一つの通説的解釈は、スミスの宗教思想は、もともと「本質的に自然主義的で合理的な分析に対するスミス時代の流行の装飾」か、でなければ、『感情論』の主要学説に対する読者の同意を取りつけ、…自らの宗教的確信の非正当性をほかすための」「修辭的策略」にすぎず、「教授職を辞した後にはもはや必要のない、対教会用の鼻葉であった」のではないかという説。

田中は、これらの主張者自身が認める「偽装というには、余りにも数多い倫理論文の最終版における神への頻繁な言及」や、第 6 版で追加された「すべてを見給う審判者に関する新説が一見するところでは、削除された節との近似性を有するように見える」という事実を十分説明できない、とみる。

③ A. シンクレアの証言によれば、スミスは削除理由を問われ、「根拠がないからではなく、その節が不必要であり、置き場所を誤っていたためである」

田中は、この‘misplaced’、との証言の重みより、スミスの削除について内在的理由が問われるべきだとする。

以上、①、②、③説のいずれにも納得できぬと考える田中は次の如き説明をする。

周知のように、スミスは第 6 版で増補された I－iii－3 で「道徳感情の腐敗（頹廢）について」語るとともに、III 部での追加部分で世論と良心との対立論を展開している。彼が「TMS 第 6 版のための新しい追加節の一つで

来世とすべてを見給う審判者に対する自らの信仰に新しい表現を与える」一方、カラスのような人間にとっては、神の正義だけが心の支えになっていることも、第6版での特色を象徴しているが、これらの事例は、人間が自然に騙されて(上述した自然の欺瞞)目先の快楽を追求することがおのずから目的実現につながるという初版の作用因の論理、とりわけケイムズ的な欺瞞理論に立脚する経験倫理学の道德性に疑問を感じるようになっていたことを示すものといえる。スミスは第6版では初版の論理に多分に懐疑的になっていたのであるが、彼は、第6版で展開されたような欺瞞＝腐敗(小論では自己欺瞞／自然の欺瞞＝道德の頹廃；上述した)、世論と良心との対立認識に伴って、初版の経験倫理学の前提をなしていた贖罪論が神の「厳格な正義」を拠り所とする第6版の良心論と必ずしも整合しない次第を感じるようになったのではないかと考えている。このような文脈の中では、人間の罪や愚行に対する無条件的贖罪論はかえって邪魔になり、厳格な神の正義要求と原理的に相容れないことになるからである。……人間の罪に対する無条件的な贖罪＝恩寵＝救済論をひっこめ、人間の主体的責任を強調する良心論を本格的に展開する傍ら、その支柱としての神の正義により直接的にアピールすることとなったのである。しかし atonement が第2部の地上の正義論と第3部の良心論との中間にあるのは“置き場所を誤っている”と考えたためであるという。

ただし、このことは、スミスが贖罪仮説を放棄したことを意味するものではないし、TMSの思想形成にとり不必要であったことを示すものではなく、この場所から削除したことこそが逆に、作用因の論理を根幹とするTMSの経験倫理学が贖罪論を前提し、その基礎の上に展開されていた次第を改めて確証する意味をもつであろう。と述べている。

既に述べたように、TMSの他の場所では、atonement, to atone なる語を用いており、田中も、筆者もそれらは self atonement なる意味であると一次的に考えるにしても、修辞学を修めたほどのスミスが、compensate, recompense などの語を多様に用いていることからすると、神と人との関

係における atonement の意味をも含ましているかも知れぬと筆者には思われる。

この最後の点について、田中は筆者の読んだ3冊の書を通して、スミス思想の根底に、当時の長老派カルヴァン主義の神学理論を前提にしていたとの説を随所に示しているが、奇異に感ずることも含めて、この点に関しては筆者の能力外のことである。

ただし、スミスの二著を読む範囲では、このような狭い限定が正しいとは思えないのではあるが。この点については、Appendix IIの次の文を引用したい。

Certainly Smith never abandoned natural religion. The new passages (There are in fact two of them, at III. 2.12 and III. 2.33) about the all-seeing Judge seem at first sight to be very near in doctrine to the suppressed paragraph and indeed one might wonder why, if Smith really wanted to retain the paragraph in another place, he did not insert it there. Yet a closer look at the 'all-seeing Judge' passages gives a different impression. Rae quotes from the first of them but does not mention that Smith reverts to the idea more fully towards the end of the same chapter. The new passages, like the suppressed paragraph, are about the doctrine of divine reward and punishment in an afterlife but Smith does not now give unqualified support to the doctrine as preached by Christians. The notion of heavenly reward, says Smith, is the only comfort for unrecognized innocence and virtue, but it has too often been taught in a form that contradicts our moral sentiments by confining divine salvation to the religious. He quotes and derides an address of Massillon to the effect that soldiers cannot hope for the heaven which one day of penance and mortification in a monk's cell can bring. 'To compare, in this manner, the futile mortifications of a monastery, to the ennobling hardships and hazards of war……is surely

contrary to all our moral sentiments’ A paragraph of support for theology is followed by two paragraphs of scorn for ‘monks and friars’ as contrasted with ‘heroes,……statesmen and lawyers,……poets and philosophers……all the great protectors, instructors, and benefactors of mankind; all those to whom our natural sense of praise-worthiness forces us to ascribe the highest merit and most exalted virtue’. Smith then ends his chapter by quoting Voltaire’s satirical couplet on the Christian concept of hell:

Vous y grilles sage et docte Platon,

Divin Homère, éloquent cicéron.⁽²⁰⁾

(「賢明で博学なプラトンを、神のようなホメロスを、雄弁なキケロを、
そこであなたは火刑にする」水田訳『道徳感情論』上 P.414

田中秀夫は、田中正司を評して次のようにいう。「……わが国のスミス研究は三人の巨匠によってリードされてきた。……後進は三人の巨匠を乗り越えたであろうか。……多数のスミス研究者が生まれ多数のスミス研究が公にされてきたことは事実である。しかし多くは大同小異の凡庸な研究にとどまっている。……日本のスミス研究は、一見、活況を呈しながらも、いまや生産性を失いつつあるのかも知れない。辛うじて日本のスミス研究の一見したところの活況を可能にしているのは、欧米のスミス研究とスコットランド啓蒙研究の隆盛の余波によってであり、最良の成果の摂取という努力によってであることは、否定できないであろう。田中正司の研究は、このような典型である。……その努力は尊敬に値するが、しかしその成果については疑問もある。とりわけ、最近の田中は、スミスの社会思想の前提を追い求め、そのルーツをカルヴィニズム神学に求めている。田中の研究はあれかこれかという問題の単純化を免れず、スミスの思想を、カルヴィニズムへと還元する傾向が強い。……もっと多様な伝統がスミスに流れ込んでいるということ、そしてそのような伝統の総合として、さらには変革としてスミスの思想と学問を理解すべきではないだろうか。」⁽²¹⁾

Ⅳ. 上記二概念の総合的解釈

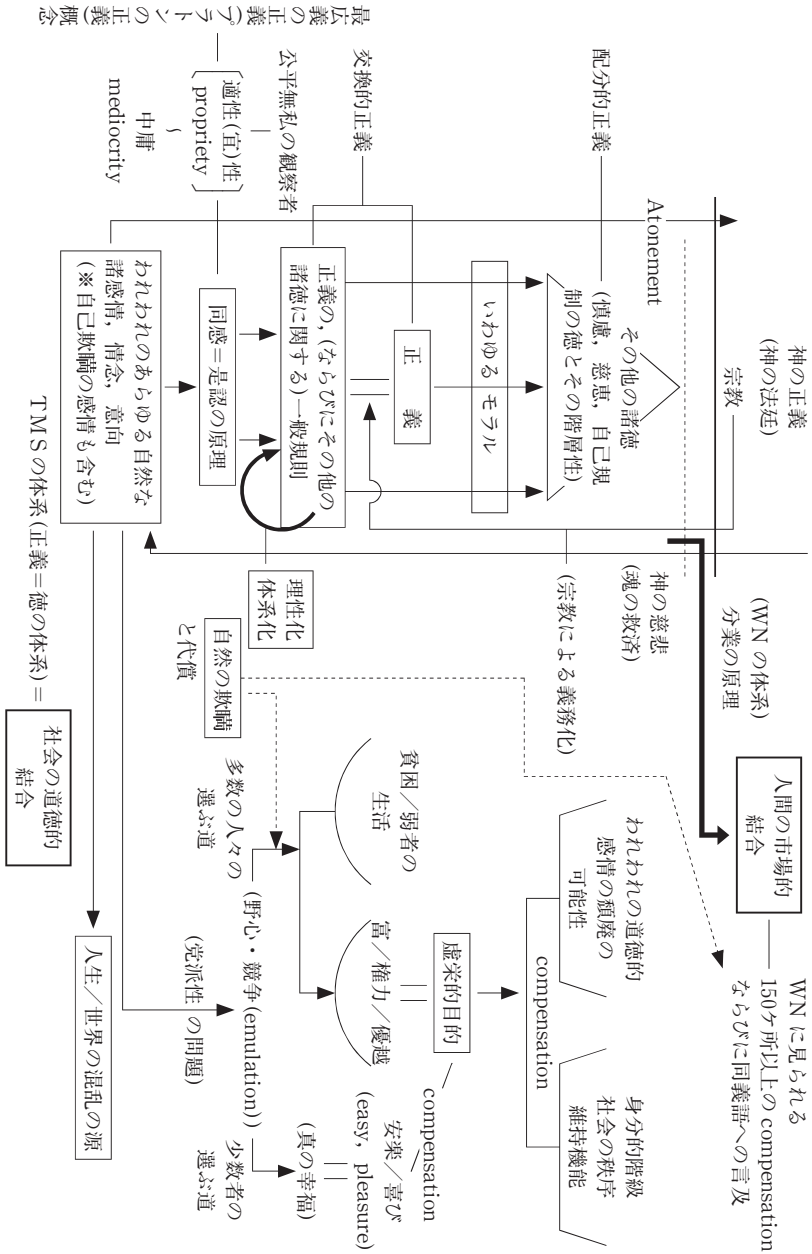
本論文で上述したことと、既出の拙論 3 篇を総合し、atonement と compensation に関する私見を述べる。

先ず、拙稿「〈補償原理〉再論」における155頁の図を次のように書き改める。

この図に即して補充説明をする。

(1) 先ず、正義についてであるが、スミス体系の正義概念は3重構造である。

スミスはTMSのⅦ－ii－1において、ギリシャの哲人プラトンとアリストテレスの正義と徳に関する分析し比較をなしている。アリストテレスは「いかなる深い理解にもとづく確信といえども牢固たる習慣に打ち勝つことはできず、またわれわれの善良な道徳は知識から発生するものではなくて、行動から発生するものである、という意見であった。」⁽²²⁾のに対し、プラトンは、「何がこれを行うに適しているか、あるいは何がこれを避けるに適しているか、ということに関する正当な諸感情ならびに合理的な判断だけが最も完全な徳を形成するに充分である、という意見であったように考えられる」⁽²³⁾とし、スミスはプラトンに親近感を感じていたようであり、この点からも、「……彼(プラトン)の説明があらゆる点で、われわれが右に(TMSで)行為の道徳的修正に関して述べてきたところと完全に一致する」⁽²⁴⁾という。「ギリシャ語で正義をあらわす語が数種の異なる意味をもつということは注目に価する。そして私の知る範囲では、すべての他の国語においてこれに相当する言葉が同じような意味をもっている以上、この言葉の示すそれらの種々なる意義の間には何らかの自然の類縁関係が存在するにちがいない。」と述べた上で、「自分の隣人に対し何らかの積極的な危害(身体、財産、名声に関し)を加えることを慎む場合にわれわれがその隣人に対し正義を尽すという場合」の正義である。この意味の正義はアリストテレスならびにスコラ哲学者の、いわゆる交換的正義(commutative



最広義の正義 (神の正義) 概念

justice) に一致し、またグロチウスのいわゆる *justia expletrix* に一致し、私の *general rules* としての正義に一致する。⁽²⁵⁾」

ギリシャ語の他の意味では、「われわれが隣人に対して、その隣人の性格、その社会的地位ならびにわれわれが感ずるに適切にして妥当であると思われるあらゆる愛、敬意ならびに尊敬などの感情を抱かないならば、またそのような感情にふさわしい行動をしないならば、われわれはその隣人に対して正義を尽すことにはならない。……かかる人を公平無私なる観察者が眺めて恐らく快く感ずるような社会的地位に置こうと努力しなければ、われわれはその人に対して不正を為す (to do in justice) といわれる場合の正義である。これは分配的正義 (distributive justice) あるいはグロチウスの *justia attributrix* と呼ばれる。⁽²⁶⁾」

そして第3のより広い意味の正義がある。第2のものに近いが、さらに広い。「……これと同様にして、われわれがある特定の自利 (self interest) の対象について充分なる注意を払わないように見える場合には、われわれは自分に対して不正を働らくといわれる。この最後の意味においては、正義と称せられるものは、行為ならびに行動の厳密にして完全なる道徳的適性と同様の事柄を意味し, (In this last sense, what is called justice means the same thing with exact and perfect propriety of conduct and behaviour,……) その中に、交換的正義ならびに分配的正義の双方の任務を包含するばかりでなく、他のあらゆる(美)徳の任務、すなわち慎慮、剛毅、節制等の任務をも包含する。⁽²⁷⁾」プラトンは、正義をこの最後の意味に解しており、それ故に彼に従えば正義のうちにはあらゆる種類の(美)徳がその完成された姿で包含されているのである。

スミスの思想体系の根底をなすのは、プラトンの正義概念であり、道徳的適性概念であり、mediocrity である。土台に全てがあり、その上部構造が狭義の justice と virtues に分かれるということである。

中位性 (中庸性) に関しては、人間自然の感情、行為、行動の置かれた事情により、高めの方が、ある場合には低目の方が同感承認されうると述

べているけれども。

WN の最後の行は、このような意味もこめて mediocrity でしめくくっているのであろう。

……It is surely now time that our rulers should either realize this golden dream, ……; or, that they should awake from it themselves, and endeavour to awaken the people.……If any of the provinces of British empire cannot to be made to contribute towards the support of the whole empire, it is surely time that Great Britain should free herself from the expence of defending those provinces in time of war, and of supporting any part of their civil or military establishments in time of peace, and endeavour to the real mediocrity of her circumstances.⁽²⁸⁾

天秤バランスの秤量物は、大西洋西岸での夢の新帝国建設から得られるであろうと期待される利益、他方の皿には建設のために過去、現在また将来にわたり予想されうる費用である。国情の真の中庸性からすれば、植民地アメリカを放棄すべしと。

(2) 自己欺瞞と general rules としての正義の抑制作用が利かなくて、それらが党派的感情や、自己規制の徳の抑止作用とも結びつかず放置された場合には、人世／世界の混乱の大半をひき起すであろうことは、スミスの分析を待つまでもなからう。その結果は、筆者のいう歴史的代償過程をたどらざるを得ないことは、戦争と革命の20世紀やテロルの行為や民族対立の長い歴史を予想させうる現実世界の事実である。

(3) 自然の欺瞞については、スミスは、TMS IV – i で是認感情に及ぼす効用 (utility) の影響についての説明の中で述べている。ここでは友人ヒュームの効用説をⅦ部において批判するのだが。

なぜ、効用性は快感を与えるか、についてのヒュームの説明は、「あらゆる物体の効用性は、その物体の所有者に対して、その物体が促進するにふさわしい快感もしくは便宜を絶えず暗示することによって、その所有者を喜ばせる。その物体を眺める場合にはいつも彼はこの快感を思い出す。こ

のようにしてその物体は不断の満足と快樂の源泉となるのである。觀察者は、同感によってその所有者の感情に移入し、必然的にその物体を同一の快的な側面から眺めるようになる。偉人の大邸宅を訪れる時、われわれは、もし自分達がこの邸の主人公であって、このように巧みに器用に工夫せられた調度品を所有しているとすれば、恐らくわれわれが享受しうるであろう満足感を感じないわけにはゆかないのである。

逆に不便に見えることは、その所有者にとっても、また觀察者にとってもいづれも不愉快に映ずるのは何故か、に關しても類似の説明が与えられる。しかしながら、大半の人々にとって人生の目的に擬せられた、富、権力、優越を日夜努力して入手してみたとして、それらが提供しうる真実の満足は、それ自体で、それを促進するのに適合させられた配置の美しさとは別に考察すれば、それらはつねに最高度に輕蔑すべくつまらぬものと見えるであろう。しかしわれわれはめったにそれをこの抽象的で哲学的な見方ではみない。そして富や地位の快樂は、なにか偉大で美しく高貴なもの、その達成は、われわれがそれにあのように投じがちな、労苦と心配を払いながらの傾向が非常に強いのである。しかもそのような快樂はそのような労苦や心配に充分価いするものと想像されるのである。

以上が自然の欺瞞であるが、しかし他方でそれは人類の經濟的發展の大動因でもあった。

ここには人類が手段と目的（＝虚榮）のための手段の合目的性追求により、一方に地上の經濟發展と、他方における、その追求により失われたものとの間に、壮大な compensation (sacrifice) が見られることであろう。

(4) 党派的感情とは、特定の事情に向き合った時に(i)、公平無私なる觀察者が遠方にいるかあるいは全くいないか、そして(ii)partial spectator のみが残る場合とその諸変化のケースでは、moral judgement が片よることは当然であろう。

以上の(1)～(4)の各々、さらにいくつかが組み合わさった場合には、必然的に compensation, atonement のプロセスに入るであろうと、スミスは考

えていたと思われる。

以上を要するに、神と人との関係において既にのべたように atonement (異教, 啓示なき宗教, その他の自然宗教にとっては、それをどう称すべきかは国により、民族により様々な語の対応が予想されるが) を措定せざるを得ず、その下で人と人との関係における正義と徳の体系を考察したのが TMS であった。すなわち、本源的な人間の自然のあらゆる感情すなわち ((i). 人間の肉体に起源をもつ情念, passions, (ii). その想像力に起源をもつ情念, (iii). 非社会的情念, (iv). 社会的情念, (v). 利己的情念) を分析の基礎にすえ、そこから同感=共感の社会化プロセスを通じて、propriety の承認、是認が得られるとしたのである。その最も基本的な一般諸規則 (general rules) が狭義の正義であり、交換的正義である。従ってそれは社会的強制力を持つことは当然である。その上に諸徳の上部構造が形成される。それらも同様に、社会化プロセスにより導出されるわけだが、(つまり general rules としての諸徳) 狭義の正義としての general rules よりもはるかに多様かつ多量の general rules が形成されると、スミスは考えている。

TMS の目次をつくづくと見てみると、スミスの論理的分析の首尾一貫性と部、篇、章別編成の妙に感心させられるのだが、スミス体系の重要概念は下記のごとき

propriety~sympathy~approbation
sentiments

の分母、分子関係あるいは上部、下部構造関と見なしてもよいであろう。

してみると、WN の justice (propriety) と TMS のそれとが異なるはずもないゆえ、人はいつも propriety の基準の下に、左の皿には徳 virtues, 悪徳 vice を、右の皿には富 (wealth) を載せて、④ 左辺の皿自体について、⑤ 右辺の皿自身について、そして⑥ ④、⑤の皿の関係における適性性を考慮しつづけるのが人間である、とスミスは見えていたのではなかろうか、古来商業の神を象徴するものとして、ハカリが用いられたことより

しても、WN であらゆる次元の compensation なる天秤が語られることは当然であったかも知れない。

アインシュタインの家には古時計が部屋ごとにいくつも懸っていたと聞く。筆者は、スミスが母と住んだスコットランドの家には、いたる処に天秤やハカリが散見せられたのではと想像するが、真実は、スミスの脳中には確かにそれらが整然と存在したであろうと確信するものである。すなわち多次元／多時間の多様な、部分的、総合的バランス（天秤）である。

V. おわりに

スミスはF. ケネー批判の中で「……自然の英知 (wisdom of Nature) は、幸いにして、人間の愚と不正義の悪結果の多くを匡救するに十分な備えをしておいてくれた。」と述べる時、それは人々の心 (感情) にインプットされた同感的 (共感的) 適性性 (感) (中庸性) を発揮しようとする心の動きをさしているものと筆者は考える。この言葉は TMS, WN でも幾箇所にもみられる。

してみると、スミスは静態的な予定調和を考えていたなどとは露いえず、人間 (集団としても) の善悪の相対的行為のダイナミックな動きの中で、適宜性へ向かわんとする心性を持っているのが自然の一構成者たる人間であるとの意味において、スミスは楽観主義者であったといえるであろう。

本稿では、TMS 体系の atonement と、それに関連する範囲内の compensation について考察をした。スミスの問題意識の中心は、神の正義に関するものではなく、現世の人間社会における facts としての

$$\frac{\text{justice (virtues)} - \text{wealth}}{\text{propriety}}$$
 の関係であった。

その基盤は propriety—mediocrity である。それゆえに、それは筆者が「世界経済の歴史的代償過程について」において主張した天秤モデルに帰着し、その天秤の軸を規定するものは、神でもなく、世評でもなく impartial spectator の心眼である。その眼からみて、バランスがとれてい

るかどうか、をスミスは常に問題にしたのである。そのためにこそ、compensation とその同義語が両著にこれ程頻出したと思うものであって、私が目にした範囲では、スミス研究書のいずれにおいても言及されることなく、索引に載せられることもない状況である。

このことをいつも不思議に思ってきたことは、本稿のはじめに述べた。この忘れられた語に、いつか陽のあたる日の来ることを祈りつつ待つ。

注

- (1) 拙論「〈補償原理〉について」広島経済大学経済研究論集，第9巻，第2号，1986年6月(a)
 - (2) 拙論「〈補償原理〉再論」，広島経済大学創立20周年記念論文集，1988年2月(b)
 - (3) 拙論「世界経済の歴史的代償過程について」広島経済大学経済研究論集，第17巻第1号，1994年6月(c)
 - (4) 拙論1988年2月(b) P.155
 - (5) A. Smith, “The Theory of Moral Sentiments”, The Glasgow edition of the Works and Correspondence of Adam Smith, Commissioned by the University of Glasgow to celebrate the bicentenary of the Wealth of Nations, vol.I. ed by D.D.Raphael and A.L.Macfie P.P.50-51, 米林富男訳『道徳情操論』(上)未来社刊 PP.130-131, なお, A.Smith 上掲書第1版の翻訳に関しては, 水田洋訳『道徳感情論(上), (下) (全2冊) 岩波文庫2003年も参考させていただいた。
 - (6) *ibid.*, P.51 同訳(上)P.133
 - (7) *ibid.*, P.52 同訳(上)P.134
 - (8) *ibid.*, P.54 同訳(上)P.138
- 身分的階級社会崩壊後の民主主義体制では、上述本文の理由より、道徳感情の頽廃と模倣により社会秩序の維持は高価となることが予見せられ、次いで、ファッショ的上意下達のシステムの可能性、そしてそれが実体化すれば、その後の揺り戻しの compensation process も想定されるように、適切な社会秩序維持機能装置を何に求めるべきであろうか。ここに至ってなお、スミスの徳の体系(P579の図を参照)の意義は不易であろう。
- (9) *ibid.*, P.63 同訳(上)P.152
 - (10) A.Smith, “An Inquiry into the Nature and Causes of the wealth of Nations”, ed., by Edwin Cannan, M.A., LL.D. with an introduction by Max Lerner, the modern library edition, New York, 1965 (以下では W. N と略記する) P326 竹

内謙二郎『国富論』上 P.427ならびに *ibid.*, PP.321-326 同訳(上)PP.421-426

- (11) 拙論C参照, ならびに, Gideon Rachman ‘The need to separate rhetoric from reality in central Europe’, in *Financial Times*, October 24, 2006の文中に次のような表現がされている。

“The political scene in Hungary is quite extraordinarily polarized.” The opposition and the government staged separate ceremonies to commemorate the 1956 up rising. The Hungarian opposition accuses the government of being corrupt former communists, who have never atoned for the Soviet era; the government tars the opposition as fascistic, anti-Semitic and Xenophobic. ……ソヴェト共産党解体後の現政権にいたるまでも, 同様にその政権担当者たちも ……筆者追記)

- (12) TMS, PP.91-92 同上訳(上)PP.214-215

- (13) ①～④の例については TMS, PP.103-104

- (14) TMS, PP.104-105 同上訳(上)PP.243-245

- (15) ⑤, ⑥, ⑦, ⑧の引用に関しては, TMS, PP.107 同上訳(上)PP.244-248

- (16) スミスはカラス (Calas) の例を引きながら, 現世だけにその考察を局限しようとする下等な哲学 *humble philosophy* は, おそらくほとんど何らの慰安も与えることはできないであろうと述べている。

TMS, PP.118-119 同訳 PP.272-274

- (17) TMS, pp118-119 同訳(上)PP.272-274

- (18) TMS, P383

- (19) 田中正司『アダム・スミスの自然神学－啓蒙の社会科学の形成母体－』御茶の水書房, 1993, 同『アダム・スミスの倫理学－『道徳感情論』と『国富論』上, 下巻, 御茶の水書房の3冊を参照した。

- (20) TMS, Appendix II PP.400-401

- (21) 田中秀夫『原点探訪アダム・スミスの足跡』法律文化社2002年, P.164

- (22) TMS, P272 同訳 P.573

- (23) TMS, P272 同訳 P.573

- (24) TMS, P270 同訳 P.570

- (25) TMS, P269 同訳 P.569

- (26) TMS, P269 同訳 P.569

- (27) TMS, P270 同訳 PP.569-570

- (28) WN, P900

- (29) WN, P638 同訳(中)P.372